

穴熊の柱

第20期生 二宮 信貴

「三田の山を越えるのに、8年かかりました。」いや、このエッセイを書いている私は、まだ卒業していないのだから、「8年かかって、ようやく三田の山を越えられそうです。」人生、うまくいっている時ほど謙虚にならなければならない。この通説は、なんとも日本人らしい、受け身で保守的な考え方が表れているように思う。私は、昔から「謙虚」とは無縁の人生を送ってきたもので、このような通説がまかり通っていることはすごく嫌であったし、なんとかしてこの通説から「謙虚」を取り除きたかったのである。

そもそも「謙虚」という言葉が嫌いである。謙る（へりくだる）、虚しい（むなしい）で「謙虚」である。とんだ皮肉である。虚しく謙る人が、真に相手を敬っているわけがない。ゆえに、「謙虚」な人間よりも、「謙虚」とは無縁な私の方が、相手を心の底から敬える人間である可能性は高いであろう。

さて、謙（自分を控えめにする）虚（うわべだけである）でない私が、謙虚さの代わりに持ちあわせているものは何であろうか。それは、控えめでもなく、うわべだけでもない、自分の本当の部分そのまま伝える能力ではないだろうか。私はそれを、「心のパンツ」を脱ぐ能力と名付けた。「心のパンツ」とは、誰しもが身につけている、社会的なペルソナの表面を1枚1枚剥がしていくと、最後に残るもののことを指す。私の中では、真のコミュニケーションとは、（心と心の）裸の付き合いである。決して、「謙虚」な人間には到達できない世界であると、自負している。とはいえ、心のパンツを「脱ぐ」能力は生まれつき持っていたものではない。小野ゼミで「身につけた」のである。思えば、大学生活最初の6年間でプライドという一張羅がぼろぼろになった後に、こんなぼろを着るくらいならいっそ脱いでしまえ、とパンツ姿で飛び込んだのが、小野ゼミであった。私は同期と大体4つ歳が離れているが、はじめからパンツしか履いていないので何も問題ではなかった。そして、小野ゼミ生に待ち受ける、数多の苦楽をともにするうちに、ゼミのみんなの前では、躊躇いなくパンツを脱げるようになっていった。そのことは、自分をよりポジティブに、よりアクティブに変えていった。昔より、人が好きになった。小野ゼミに入ってから、ゼミ以外のことも、何だかうまくいくようになった。それは「小野ゼミのおかげ」というよりも「小野ゼミのみんなのおかげ」と言う方が、私の中ではとてもしっかりくる。8年間の大学生活の中で唯一、小野ゼミでの2年間は、ずっと人生が上向き続けている気がする。それはおそらく、パンツを脱いで、誰よりもゼミでの交流を楽しんでいたからだと思う。人生、うまくいっている時ほど心のパンツを脱がなければならない。これを新たな通説とするべく、布教活動に臨む所存である。2年間、本当に楽しかったです。ありがとうございました。